京 機 短 信　No.284, 2016.08.20
京都大学　京機会）　tel.& Fax. 075-383-3713
E-Mail:　jimukyoku@keikikai.jp
URL: http://www.keikikai.jp　編修責任者　久保愛三

お盆の送り火(京都）は五山だけではない

-　もう一つ「たけにすず」と言うのがあった　-

昭和 28 年卒　中川　隆夫

毎年、お盆の 8 月 16 日に京都の夜空を彩る送り火は、大文字など「五山」と言うことで定着してしまっている。ところが、小生の子供のころ、あるいは大学生の頃だったかも知れないが、小生より一時代古い、明治または大正生まれの方々が「 ” 五山の送り火 ” と言う言い方は昔はしていなかった。五山の他にもう一つ ” たけにすず ” と言うのがあったと覚えていたが、あれはいつ無くなったのか。」と言っておられた記憶がある。

「たけにすず」は「竹に雀」の略であると広辞苑* などに家紋として紹介されているが、この家紋と送り火にどのような関係があるかは分からない。古く江戸時代には、これに関し諸説あり、これを紹介した人の名も挙がっている。その中には近衛信尹（のぶただ）氏の名も見える。京都の送り火には五山だけでなく、平仮名の「い」（点火場所：市原野)、漢数字の「一」(鳴滝)、「蛇」（北嵯峨)、「長刀」（観音寺村)、および、「たけにすず」（西山）の名が記されている。この内「い」および「一」の名は、筆者もかってどこかで見たことがある。

農学部グラウンドより（今年は残念ながら大雨でよく見えませんでした）

「たけにすず」については二つの説があり、一つは「竹の先に鈴」と言うものであり、他の一つは「竹に雀」の略であると言う。筆者は子供の時、一時代昔の人、数人から「たけにすず」の名を聞いたが、その中には父（故人、明治 32 年生まれ）および祖母（明治 4 年生まれ）も含まれている。因みに、筆者が「たけにすず」に固執するのは、お盆の送り火が「五山」に定着する直前まで、「たけにすず」と言う送り火があったと推察するからである。これに関する情報をお持ちの方は中川 ta-n@mwd.biglobe.ne.jp までご一報くだされば幸いです。

*　新村出編、広辞苑（昭和 30）”たけにすずめ”、p.1321

（おわり）

―― 京機短信への寄稿、　宜しくお願い申し上げます ――

また、原稿が切れてきました。京機短信存続が問題になるレベルです。
是非とも投稿、お願い致します。　気楽に　！！

*但し、原稿のタイトルの次に、**著者名と卒業年次を必ず記入**してください。その記入のない投稿がかなりあり、編集者の仕事を増やしていますので、何とぞご配慮の程、お願い申し上げます。*

【要領】

宛先は京機会の e-mail： ***jimukyoku@keikikai.jp*** *です。*

原稿は、割付を考えることなく、適当に書いてください。　割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。　　宜しくお願い致します。

パキスタンを拠点に18年間医療活動を続けている日本人医師のお話

京機九日会　八月度例会（平成28年8月9日大阪中央電気倶楽部）配付資料

井上ひさし

私は今、世界でもっとも貧しい国で、自分の持っているものすべて注いでその国の人達の為に尽くしている一人の医者の話をしようとしています。すべてを捧げて貧しい人達の為に医療活動を続けている日本人の話です。私がこの中村哲先生という医者の話をするのは、他人に言われたからこうだとか、ああのとうこれが一番妥当な生き方だからこう生きようとかいうことでは、もうダメだからです。中村さんは一九四六年、福岡市の生まれ、三十八年間、パキスタン北西辺境州の州都ペシャワール市を拠点にら病（ハンセン病）とアフガニスタン難民の診療に心身をささげている医師で、年間二十万人を診療するNGO、ペシャワール会の現地代表です。医師という、収入の多い仕事についていた人が、なぜこの生き方を自分で選びとったのか。彼は無給です。給料は貰っていません。家族の食い扶持は定期的に帰る福岡の病院に勤務して稼いでいる。なぜ彼はそんなことをしているのか。この世はお金だけではない。他人の役に立つことが一番自分はうれしいんだと考えているからです。そしてこういう人たちが、実は日本人の信用を高めている。アフガニスタンという国は大変歴史の古い国です。たとえば孫悟空の話、あれは中国の偉いお坊さんが、仏教のありがたい教典を探しにアフガニスタンを経てインド、天竺へ旅をする。つまり「西遊記」ですね。その経典が中国語に訳されやがてそれが日本にやって来るわけです。ですから決して日本とつながりの

ない国ではありません。このアフガニスタンの普通人の平均年収は八百ドルです。日本円にすると、約七万円位です。一人の大人が一日一生懸命働いて一年間の収入は、七万円です。私も会員の一人ですが、中村哲さんの活動を支えるボランティア組織があって、これをペシャワール会といいます。一年間の会費が一万円です。最低三千円から会員になれる。そのお金がアフガニスタンに運ばれると、私の出した一万円が、アフガニスタンでは普通の大人の一七ヶ月分の収入にあたる。日本のお金はどうの所それなりに値打ちがあって、世界でもっとも「遅れた国」に行きますと、それが何十倍もの値打ちをもってくるわけです。

ですから日本で一億円集めて、それをそっくりアフガニスタンに持って行くと何十億円もの価値が出てくる。こういう為替レートの仕組みを利用して、日本でお金を集めてパキスタンやアフガニスタンに送ってそこで物資を調達すると、日本の一万円で向こうの何十万円の買い物が出来るわけです。中村さんはまず、ペシャワールという、どう新聞にしきりと出て来る所ですが、ここを中心にらい病の医療活動を続けている。向こうの人は、距離を表すのに「ああ、あの村は三日の距離だ」と言うそうです。つまり何キロという計算の世界ではなくて、歩いて三日かかるところだという国なのです。平均寿命は四十三、五歳です。大人がだいたい四十五歳まで生きれば長生き。日本でいうと、七十から八十歳ぐらいで、「ああ、あの人はまあ

寿命に不足はない、精一杯生きられたら」というのが日本人の感じ方ですが、アフガニスタンではその半分です。四十五歳まで生きたら、ああ長生きだなと思う。それから生まれた赤ん坊は、五歳までに四人に一人は死んでしまう。そういう、貧しい国です。ただ一番貧しいのは、外側の人が決めるのではなくて、そこに住んでいる人が決めることです。一年間に七万円の収入がなくて、赤ん坊は生まれてつぎつぎに死んでいく。長生きしたところでせいぜい五十歳、そういうところは不幸だなと外からは言いますが、住んでいるアフガニスタンの人にとってはそれが当り前ですから、そう不幸ではないのかも知れませんけれども、

それから、地雷各地に対人地雷がたくさん埋められたままですが、今の地雷は、人を殺さないで、半死半生にする。足が一本取れると、腕がなくなると、顔がぐちゃぐちゃになってしまうと、体が一生、不便になるように爆発する。地雷が爆発して人を殺すと、そこである意味でおしまいなんです。人はやがて死者を忘れる。でも足一本なくしたり、手を一本なくして一生生きて行かねばならぬようにすると、地雷を仕掛けた国の恐ろしさを一生思い知るだろう、というわけです。今の対人地雷は、人を殺さないけれども半死半生にして、そして一生を生き永らえさせて、その恐怖を体の芯から知ってもらうという恐ろしい兵器なのです。まったく人間というのは鬼畜生にも劣るところがある。統計によって数字が違いますが、

国連の調査では、世界に八千万個ぐらいの地雷が埋められているという。そしてその半分が、アフガニスタンに埋められている。その意味では、アフガニスタンに人間の悪意が集中しているといっていいでしょう。アメリカがそのアフガニスタンに対して空爆をしました。爆弾と食糧をいっしょに落とすのもどうもインチキくさい。子供達が落下傘で落ちてくる食糧を取りに地雷原に飛び出していく。それを拾う為に何十人、何百人となく地雷を踏んでしまう子供達やその母親達がいる。それからカイバル峠、この地名も近頃よく聞きますが、パキスタンとアフガニスタンとをつないでいる峠があります。そこに立て札があって、私も写真で見ましたが、「皆さん、注意して下さい。アフガニスタンでは一日に平均七人の人が地雷に引っかかっています」と書いてあります。このアフガニスタンは、この二十年間内戦の連続です。これは日本の戦国時代のような国、あちこちでいろんな部族がいて、戦国大名みたいに群雄割拠しているわけですね。いつも政情が定まらない。そこで、そこに引強がつけこむという構図です。これは、アフガニスタンの人々の責任だと思います。そこの国がきちっと安定しないのは、そこに住んでいる人達の責任がありますから、これはいちがいにアフガニスタンの人達を全部いい人だというふうには言えません。ただ、アフガニスタンには選挙制度がありません。ですから、自分達の指導者を自分達で選ぶことが出来ません。日本には選挙制度があります。

かなり棄権する人も出ています。特に若い人の棄権率は非常に高い。でもアフガニスタンには選挙をする制度もない。自分達のリーダーを選べないのです。そういう所で、二千五百万人の人達が生きている。らい病では神経がなくなります。サンダルを履いて生活しているのですが、サンダルは底に釘を打ちますので、履いている上に釘が出てくる。そうすると、サンダルの釘がどんどん足に食い込んできますが、らい病患者にはわかりません。神経がありませんから、皮膚がどんどんこわれていく。そしてその傷口からばい菌が入ってきて他の病気になる。これをどう解決したらいいか、中村先生はそんなに考えて、病院の中にサンダル工場を建てました。釘を使わないで、日本から取り寄せた強力な糊でくっつけたサンダルを作った。こういう細かな所から改良して行くんですね。自分達で改良サンダルを作ってしまいます。自分の技術を、中村さんの場合は医学ですが、それをそこの人達の為に役立たせている。その活動を日本のいろいろな人達が一年間に三千円、学生さんは千円ですが、寄せ合って支えているわけです。中村先生がやっている基地病院は、すでにもう十ヶ所に分院という小診療所を持っています。ですから、アフガニスタンの人達はこう思います。日本人はどうしてこんなに親切にしてくれるんだろう。戦争が始まると他の国のボランティアは、みんな逃げてしまうのに、なぜ日本人のこのお医者さんのグループはやさしくしてくれるんだろう。こうして日本人に対する信頼が

生まれてくわけですね。何ろ中村先生とその仲間達、看護婦さん、検査技師、
みんなボランティアです。お金にはならないけれど、人の為になるのが何よりうれしいと、う
人達がそこへ出かけて行って一生懸命やっている。そう、人達によって、実は日本人の信用が
支えられている。おとと一、アフガニスタン、トルキスタン、タジキスタンの辺り、ユーラシア大陸
中央部と言いますが、ここにとてつもない大干ばつがやって来ました。その被害は
アフガニスタンにおいてもっともひどく、〈千二百万人が被害を受け、四百万人が飢餓に
直面、餓死寸前の者百万人と見積もられた〉といいます。中村先生によれば、地球の
環境条件が非常に変化をきたしてきて、それがユーラシア大陸に現れてきている
というのですが、とにかく水がなくなってしまった。日本は急な山がたくさんある島国ではせ
洪水が起こらないのだろう、というの昔に学校で習ったことでしょうが、日本には水田がたくさん
あって、ダムの代わりをしてくれる。山から激しく流れてくる水を止めながら、止めた水で稲が
育ってきらに下の田へ水が行く。水田というのは治水機能があるということですね。
アフガニスタンは、平均四・五千メートル、低い所で三千メートルという山国、高地国です。
富士山より高い所で人間が生活している。もちろんそこでもやはり畑を作ったり、麦を作っ
たりしています。どこから水を持ってくるかといいますと、あそこは早くから雪が降って遅く

まで溶けないで、所によっては万年雪になりますが、その雪があたたかくなると溶け始めて地下水になったり、国土を流れる河になったりするわけです。ほとんどは地下水になって、井戸を掘って生活水にしたり、畑に回したりして、生活と農業を成立させている。それが日照りになって雪が積もらなくなってきた。地球が今、非常に大きく変化しているのは、みなさんご存知でしょう。地球温暖化、化石燃料を燃やしすぎて地球の周りに薄い膜が分って、地球が温室みたいになってきている。世界的、社会的な課題は地球のこの温暖化をどう食い止めるかということです。みなさんが社会に出て働いている頃に、たぶん、地球をどうしたら人間が住めるように出来るかという、大きな問題がおこっているでしょうが、とにかく去年（二〇〇〇年）の夏、ヒマラヤの雪が少なくなり地下水が大変に減ってしまった。井戸は涸れる。河の水は干上がる。水がないとこれはもう、家畜も人間も生きていけません。村を捨てて都会へ出てくる。そして都会で難民になるほかない。中村哲先生は、パキスタンとアフガニスタンに病院を十ヶ所作ったわけですが、これは全部日本の人達が寄付金で支えている。これはさっき申し上げたが、各地で無料診療を続けているうちに、どんどん子供が担ぎ込まれて来て、赤痢やコレラや脱水症でつぎつぎと亡くなって行く。中村先生とスタッフ達は、何故子供が急に死んでいくのか、原因は何かと調べていくうちに

実は、水がなくなっていて、食器が洗えないとか、汚い水を飲むとか、干ばつによる水不足が原因で、弱い子供達がつぎつぎにやられていくことに気が付くわけです。そこで中村先生達は考えます。「我々は医師として来たけれど、このまま放っておいていいのか。もし病気の原因が飢饉、つまり水不足にあるとするならば、医者の仕事はいったん脇に置いておいて、きちんとした井戸を掘るのが大事ではないか」と議論を始める。「でも、医者が井戸を掘るわけにはいかないではないか」「掘っても下手だろうし。それよりもやはり医者として、看護婦として、手を尽くすのが一番いいのでは」「いや、やっぱりその前に水を何とかしなくては」大変な議論があった末、中村哲という人物はこう決意します。「医師である自分が、命の水を得る事業をするのは、みなおちかけ離れた仕事ではない」ということで、お医者さんのグループが今度は井戸掘りの計画を立てるわけです。もちろん医療行為は続けながら、「風の学校」という、世界中で井戸を掘っている日本人のボランティアのグループがあります。主にアフリカ、南米とか砂漠地帯で、自分達の技術を活かして水に困っている人達の為に井戸を掘る奉仕活動を続けている。そこと協力し合ったり、それから「昔、あの人は井戸掘りをしてたらしい。今はでもはやんないわねえ」なんて言われているおじいさんが参加して、そうしてやっと一年間でアフガニスタンに井戸を一千本掘った。四千メートル、

五千メートルの山の上で普通に暮らしているところです。しかも飢饉です。干ばつです。水不足です。上のほうの地下水は涸れていて、もっと下の水源を掘り当てないと水は出てこない。彼等は、現地の人達と協力して、一生懸命掘るわけですが、これが実は大事なことなのですね。日本人の持っている技術を使って現地の人と一緒に井戸を掘る。あるいは病人を看る、という仕事を通じて、アフガニスタンに医者や看護婦や井戸を掘る専門家を育てているわけです。そうして六百五十本ぐらいもの井戸を掘っている。そうして、成功するのですが、山ですから掘っている時に、ときどき水牛ぐらいもある大きな固い石にぶつかるわけです。そんな時にどうするか？さきほども言いましたが、アフガニスタンはずっと内戦続き。一時期共産党政権が出来て、そのあと押しもソ連がやっていた。それに反抗する反政府ゲリラをアメリカが応援した。これが今テロや紛争の原因になっているわけです。つまりアメリカとソ連が、代理戦争をアフガニスタンでしていた。そのお互いが埋めた地雷がたくさんあるわけです。また、打ち込まれたミサイルが不発弾であちこちに埋まっています。そこで中村先生は、その喝活躍したゲリラの指揮者達を集めて、不発弾や地雷を掘り出して解体し、中にある火薬を使って石を爆破していきます。石に火薬を詰める為に穴を開けなければならないのですが、これが普通のドリルでは歯が立たないくらい硬い。すると、動かなくなってソ連軍が残していった戦車がありますから、

そのキャタピラ、地面にかみ合う部分、ここは世界で一番硬いハガネで、これを外してきてドリルの先に付けて石に穴を開ける。そして火薬を詰めて爆発させて掘り進んでいく。つまり、人を殺す兵器を、人を助ける井戸掘りに使っているのです。凄い知恵だと思いませんか。では、中村先生達の報酬は何か。現地の作業員がひとり亡くなったことがあります。滑車で撓ね飛ばされて井戸の底に墜落してしまいました。お悔やみに出かけた中村さん達に、作業員の父親が言います。「こんな所に自ら入って助けてくれる外国人はいませんでした。息子はあなた達と共に働くこと、村を救う仕事で死んだのですから本望です。全てはアッラーの御心です。この村には大昔から井戸がなかったのです。みな濁った水を飲み、わずかな小川だけが命綱でした。その小川が涸れた時、あなた達が現れたのです。しかもその井戸がひとつ二つではなく八つも。人も家畜も助かりました。これは神の奇跡です」こういう言葉を唯一の報酬として、それに励まされながら井戸を掘り続けていくのです。そしてたとえば、日本の他のボランティアグループは、アフガニスタンにいられなくなってイランやパキスタンに難民になって出て行った村人が戻れるように、彼等のふるさとの村の地雷を除去して、一生懸命に道路を作っている。村が整備され、井戸があれば農業が出来ます。小麦もあります。果物もあります。アフガニスタンは実は果物王国です。山形県も日本で

一番というぐらいの果物王国ですね。作っていないのはみかんとバナナぐらい。さらに
これは山形県の贅さだと思いますが、値段の高い果物を作っている。一山いくらではなくて
一粒いくらという、高値の果物の王国です。高級料亭で「えーこれは、山形のラフランスで
ございます」なんて口上付きで、小さなかけらが出て来る。「おお、これがそうですか」
と、みんなゆっくり味わって食べる。それがここに来ると子供もみんな丸かじりしてますから
ね。贅沢といえば贅沢です。作っている強みですね。ところで、アフガニスタンのスイカは
世界一おいしいそうです。そうした農作物が出来る条件を整えて、難民を自分の村へ
帰すという運動をしている大勢の日本人もいます。それから若い日本人達で、地雷を
ゆっくり掘り出す、そういう地道な仕事を続けている人達もいます。ちなみに今の
スピードで地雷を除いていくと、世界のすべての地雷を除去するまでには一千年かかる
そうです。馬鹿ですね。人間というやつは。だーれに馬鹿はところがある。とんでもない
人殺しもいれば、人殺しをする地雷を作る工場もあれば、地雷を振りまく政治家や
軍人達がいる。でも絶望するのは早い。というのは、同時にその地雷をコツコツ一個ずつ
掘り出そうという人達も一緒に生きている。ですから、将来どっちになるかですね。
どっちの味方になるか。どっち側に立つか。これが皆さんの一生の値打ちを決めていく。

農業というのは、これは人を助けるほうに回る仕事です。皆さんは人の為に大事な食べ物を提供する、そういう仕事に就かれる割合が多いと思いますが、私はずっとその応援団のつもりでいます。仕事にはそうやって、他人が不幸になればなんぼ、という仕事と、人を助けて人の為になっていくら、という仕事がある。そして、人を排除したり、人を殺したり、人を不幸にしたりして成立する仕事の方が、実は給料がいいのです。そのことを、頭のどこかにおいていただきたいのです。本論に戻って、困っている人を助けたい、自分の技術を人の為に役立てたいという人達が、そういう国々に出かけて行って活動している。これはひょっとしたら日本人が一番多いかも知れません。これが日本の信用になっている。日本の政府の信用なんか全然ないですよ。「日本の外交方針は？」なんて訊く外国の新聞記者は一人もいません。アメリカの外交方針を見れば、日本はその三下奴、アメリカの言うとおりにやっているだけですから、何も訊く必要がない。外務省の実体は間違いなくアメリカ政府の出先機関で、たかうみんない、加減はドタバタ騒ぎをやっていても成り立つ。何も考えない。アメリカの言う通りにやっているだけ。だから九月十一日のテロ事件でもさっそくインド洋に出かけて行くのです。たしかに理由なく、その人の未来を断ち切るというのは人間として許されません。あのテロは極悪非道の人殺し

です。でも、それを追いつめるには別の方法があるのではないか。皆さんはもちろん、国連をご存知でしょう。こういう世の中になってくると、これからますます大事になってくると思います。その国際連合がいろいろな活動をしますが、その予算は当然、国連の加盟国が負担している。これは国によって負担率が違います。一番負担率の高い国は、アメリカです。一九九八年の国連の通常予算一五億六〇〇〇万ドルの二五パーセントが割り当てられている。二番目はどこか。日本で十八パーセントです。三番目がドイツで九・六です。国連加盟国は二百近くありますが、百番以下の小さな国は〇・〇〇一パーセントぐらいを負担している。ところが、国連の費用の二五パーセント、つまり四分の一を負担しなければいけないアメリカがずっとそれを払っていない。この間テロが起きて、国連総会でテロに抗議する決議をしてもらう為に、あわてて三億ドル払いました。アメリカが分担金を払っていない為に、国連の予算はいつも赤字です。その赤字を埋めている国の代表が日本です。もちろん、国連にもたくさん問題はありますが、とにかく日本は国際社会に大変な協力をしているんです。何も恥じる必要はないのです。我々が一生懸命働いたお金で、世界のことをうまくやっていこう、争いをなくしてみんなでなんとか生きていこうという、国際組織の活動のもとに

なる費用をずいぶん負担している。だから堂々としていい。それから日本は、戦後六十年以上、軍事行動で外国人を一人も殺していないんです。日本人も一人も軍事行動で死んでいない。さらに日本は、部品を作っていますが、完成した形の兵器を一台も、爆弾一個も外国に売っていない。これは素晴らしいことです。日本はよく顔が見えないと言われます。その度に日本人は「そうかなあ、はっきりしていないのかな」なんて自信をなくしますけど、これは間違いです。日本は戦後六十年間、軍事行動で一人の外国人も殺していない。一個の爆弾も完成した兵器として外国に売ったことがない。潔白な国なのです。これを私は誇りに思います。これこそ日本人の六十年間の努力の結晶だと思います。さらに知らない国へ実は二十年も前から出かけて行って、そこの人々を病気から救い、井戸まで掘って一生懸命尽くしている日本人がいて、それから地雷をせっせと取り除いている日本人がいる。これも又、国際貢献なのです。ところが私達が選んだ国会の人達、あるいは霞が関の人達は、なんでもアメリカの言うとおりにやっていないとこの世は生きていけない、と変なふうに考えている。アメリカが何か言うと、ハイ、ハイと言ったとおりにする。こう考えたらいいかも知れません。ある町内会。そこにとんでもない大金持ちがいて、あんまり一人で

稼ぐので、町内会はケンな貧乏ーている。この大金持ちは町内会長で、会長なので町内会費をせんせん払わない。町内で意見をまとめてもらいたい時だけ、ちょっと払う。しかもいばりくさって、何でもオレの言うとおりにーろ、と言う。そこに二番目の金持ちがいて、これが副町内会長、一番目の金持ちの言うことばかり聞いてる。町内会長にベターッとくっ付いて「はい、会長ごもっともです。会長の憎い人は私も憎いです」なんてことを言ってる。で、町のはずれに貧民街があって、ほんとは少ー立派な会長だったら、稼いだカネをちょっと回ーて屋根を修理ーたりすればいいのに、「あそこが貧乏なのはオヤジが酒呑みで怠け者だからだ。早く町から出てってくんないかな」なんて言う。そこの子供がつねづね「あの会長はカネ持ちかもーんないけど、やること冷たいね、意地が悪いね」なんてこと言う。で、会長の家に石を投げたらガチャンと窓ガラスが割れる。これまで石なんて投げられたことがないもんだから、町内会長はカーッとなって子供を出せーっと、今その子供のボロ家を、手下の副町内会長の日本をお供にーてたたきこわそうとーている。私の勝手な考えですけど、アフガニスタンの空爆は、この町内会のたとえ話にちょっと似てるんじゃないかと思います。私はテロリストを応援する気は

ありません。命は、自分が使い尽くすものであって、他人がそれを途中で断ち切ったり、他人の都合で先を失くしてしまったり、これは絶対に許しちゃいけません。ただ、そこまで追い詰められていくというつらさもある。それを解決するには、国家の上にある国際組織をうまく運営するしかないわけですね。アメリカは、人口は世界の四、五パーセントなのに、世界の四分の一の二酸化炭素を排出している国です。そのくせ京都議定書にはそっぽを向く。それから地雷禁止条約にもそっぽを向く。核実験禁止条約にもそっぽを向く。はっきり言えば、今の所は一人勝ちの国家です。アメリカには忠告者が必要です。その忠国者の一つに日本がなれたら、素晴らしいと思うのです。なにしろ日本は、武器を売っていない、一人も軍事行動で人を殺していない国でもあり、さらにこうして他人の国に出かけて行って他人の不幸を救おうとしている国の一つでもあるからです。もちろん、一方には、アメリカの言うことを聞かないと日本は生きては行けないのだと唱える日本人もたくさんいます。みなさんはどちらの日本人につきますか。みなさんの課題は、お一人お一人世の中のいろんな先行きがあるけれども、どこでどんな生き方をするのか。もっとたくさんの選択肢はあります。ありますけれど、簡単に言いますと、そういう分かれ道にみなさんそれぞれ立っている。ですから、

将来の自分の進む道をじっくり考えていただきたい、というふうに今申上げているのですが、やっぱり私の頭の中には、小さい頃にグラウンドで見上げた当時のあの農業高校のお兄さん達の、走る姿の美しさ、速さ、円盤投げを投げる時のあのフォームのかっこ良さ、その飛ぶ距離、というのを、今だにどこかに憧れて尊敬している気持ちがあるものですから、高い所からちょっと生意気なことを申し上げたかも知れませんが、少し先に生まれた世代の一人として、日本は、かなりいい生き方をしている部分もあるし、そうやって世界の人達の信用をつないでいる所もあるということもあるし、そうやって分かっていただきたかったのです。日本は今、ダメな国ということになっていて、ダメな所は徹底的にダメです。これは『週刊東洋経済』という経済誌に載っていたのですが、小泉首相は、二日の起きた次の日に、山崎拓幹事長とすれ違った時に、「おい、ついてるね」と言ったそうです。すると「ええ、ついてますね」と山崎さんも答えた。これは私が邪推で言っているのではなくて、ちゃんと週刊誌の記事になっている。つまり構造改革とかいろいろ言いながらもう経済はどんどん落ちていく。小泉さんとしても手がなかった所にあの二日が起こった。しばらくは世の中はそっちへ気が行って、小泉内閣が何をやろうとして

いるかなんてことは一ケ月位は関心がそれてしまうだろうと、そのことで「ついてるね」「ええ、ついてますね」という問答になった。たまたま側にいた記者が怒って書いています。だからそういう人達も、その人達を選んだのも私達ですから、そういう間違いを犯している大人達もたくさんいるわけですね。それが多数党ですから。そうではなくて、人間のことをしっかり考える、農業のことをしっかり考える人を選ばねばならない。今まで政権は農業のことをしっかり考えてくれましたか。結局だまーだまし、補助金をあげるから妥協策に手を打てと、それぱかりです。それなのに、農村の大人達は日本の農業をここまで追い込んでしまった人達に、やはり投票しているわけですね。みなさんはそういう愚かなことをくり返さないで、自分の大事な一生を自分がやりたいことで貫き通せるような、そういう世の中にしていただきたい。これはないものねだりか、無責任なおねだりか知りませんけど、その為に、我々年をとった人間もみなさんと一緒に仕事をしていると、そんなふうに考えています。

時間になりました。たくさんお話ししたいことがあります。今日は農業からわざと離れましたが、素晴らしい人間もいる、くだらない人間もいる。でも、どうせ

一生を終えるなら素適な人間になって、自分のやったことが人から感謝される、
あの人がいるお陰で私は生きている用要があった、というようなお一人お一人に
なられることを願っていますし、百年、実際は百六年位ですね、長い伝統の
置賜農業高校の卒業生、あるいは在校生として「あの人はやっぱり違うね」
という、毅然とした人間になられることを希望します。
感心に聴いていただいてありがとうございました。素直な生徒さん達に
感謝します。ご清聴ありがとうございました。

井上ひさし

京機カフェ：　第13回　**文楽鑑賞会**

平成２８年７月３０日(土)14:00~19:30　大阪・国立文楽劇場

恒例の文楽鑑賞会が７月３０日の暑い土曜日に国立文楽劇場に１４名の会員、ご家族が参加して薫樹累物語（めいぼくかさねものがたり）豆腐屋の段／埴生村の段／土橋の段、伊勢音頭恋寝刃（いせおんどこいのねたば）古市油屋の段／奥庭十人斬りの段の二つの名作を鑑賞した後、１２名が参加して文楽茶屋で懇親会を持ちました。今年は夏休み公演とは言え、通常公演と同じボリューム(料金も！)でしたので、文楽ファンには満足いただけたのではないかと思います。今までご覧になれなかった方、特に若い方には、来年もこの世界遺産鑑賞会を開催いたしますので、どうぞご参加下さい。　（並木）

茶緑黒３色縞の幕がするすると開いて、黒装束が柝の音のあと、上演曲目と太夫・三味線の奏者を紹介する、ややあって太棹の三味線にのった渋い声の太夫の浄瑠璃が始まる。毎回なじみの幕開けが、遠い昔の物語の世界に案内してくれる。

今年の演目は「薫樹累物語（めいぼく　かさねものがたり）」と「伊勢音頭恋寝刃（いせおんど　こいのねたば）」。忠と孝、義理と人情に固められた世の中で、思案を越えて動くのは、男女の情愛と物事への執着、出会いの偶然を織り込んで進むドラマで、遠い昔の人情の世界に入りこんで行く。今回の女の恨み話と刃傷もの二本立ては、話自身は両方ともおどろおどろしいが、話の運びが判りやすく再構成され、舞台回しにリズムがあるので、初めて文楽を見る人も、劇の進行を

十分に理解できて楽しめるものであった。

　マイク無しの生の声で広い客席に向かって、物語の背景、人物の動きを説明し、会話まで詳しく表現する太夫の浄瑠璃の響きは、三味線の音色と共に文楽の基本的な要素である。ここ数年の間に有名な長老の太夫の引退が続いて、雰囲気が変わらないかといささか気にしたが、そのような心配は無用であった。張りのある若々しい声が三味線にのってよく響く。床に座った太夫に向かって、演奏に先立って「００太夫」という掛け声が、女声を含む複数の人から何回か懸かった。これは初めて聞いたことであった。

　京機カフェ文楽鑑賞会は１４回を数えるようになった。当初、「文楽」という古典芸能を見に行こうとの大まかな気持ちで始まったものが、だんだんと細かなことに気が行き、上演される曲目、さらに、太夫、三味線、人形遣いと彼らの演技内容にまで、関心が進むようになった。

　文楽の側も１０年を超える間には、出演者の世代交代があったりして、目立たぬ乍らもかなりの変化があった。文楽を公演されている方々が、より判りやすく、面白く、楽しいものにするために、古い曲目の復活や、新作の取り込みなどに、多大な努力を払っておられることが判りうれしいことである。当日は観客も８０％以上の入りのようで賑やかであった。観客数が安定して微増していることや、愛好者層が分厚くなっていることは、上のようなことからも推定でき、政治家の差しで口にも関わらず、文楽が健全に運営されていることが確認されて同慶の至りである。
さて、京機会の参加者が、夫婦連れを含めた常連がほとんどになったのが、今回の様子である。当初の趣旨では、常連が半分、新顔が半分位の組み合わせで、この古典芸能の面白さを広く紹介して、愛好者を増やして行きたいということであったようだが、幸い、回を重ねるごとに新顔が常連になり、さらに通常公演や、昼夜の通し狂言などにまで、足を運ぶ愛好者になった方もおられる。これほどの参加者の進化に対応して、この集まりの魅力を続けてゆくのは、お世話いただいている幹事方にとって、新しいうれしい悩みの到来ではなかろうか。文楽の面白さが学生層を含む若い世代にさらに広く理解され、一層深く愛好していただけることを心から望むものである。　　（小浜弘幸　　昭 32　河本研）

京機会 1970 年卒同窓会のご案内

各務です。35 度を超える真夏日が続いておりますが，皆様におかれましてはお元気にお過ごしのことと推察いたします。

昨年に引き続いて同窓会を開催致したくご案内を申し上げます。

すでに古希を終えた人やこれから迎える人もおられますが， 気力体力あるうちに旧交を温め合いましょう．

また， 近況などお知らせ頂ければと存じます。

1．名称 ： 「京機会 1970 年卒同窓会」
2．日時 ： 11 月 12 日(土) 13:00 ～ 16:00
3．場所 ： 京都大学時計台２階第IV会議室
4．会費 ： ￥8,000 / 人　夫人同伴歓迎です。夫人会費 5,000 円 / 人
5．回答 ： 下記の京機会出欠フォームか
幹事へのメール（s45@keikikai.jp）でお知らせ下さい。
https://keikikai.securesite.jp/event/form/?id=83